

社会思想史

経済学

そもそも経済学なんてものは、どうすればカネ儲けできるかという話で、そんなことは卑しい商人の考えることであり、まともな知識人が議論することではありません。**中世の大学は、神学・哲学・法学・医学の4学部**しかなく、経済学部だの、商学部だの、そんなものはありませんでした。未来の大学で経済学を教えているなんて聞いたら、トマス=アクイナス先生は失神するでしょう。

経済学が哲学や法学と並ぶ学問として登場するのは、**絶対主義**の時代です。ローマ教皇権から主権国家が独立し、国家間の戦争が続発するようになると、絶対君主は自国の安全を保つための軍事力(兵士の数、武器の数)を計量化し、それを維持するのに必要な予算、税収を計算しなければなりません。これが、経済学のはじまりです。

エリザベス1世時代の**東インド会社**の重役**トマス=マン**(注)、太陽王ルイ14世の財務長官**コルベール**は、こう考えました。政府の収入は税金だが、圧倒的多数の農民は、生きるのに精一杯で、彼らから得られる税はごくわずか。一方、東インド会社などの大商人は、植民地との貿易でぼろ儲けしている。**大商人を保護**し、彼らからたっぷり税を取るべきだ。また輸出拡大のため、毛織物などの**手工業を保護**するべきだ。これが、**重商主義**の思想ですね。

(注) 『魔の山』を書いた20世紀ドイツの作家とは無関係。

ブルボン家は商工業者だけを保護し、フランスの農村は、封建領主の重税により荒廃していきました。この重商主義を批判したのが、ケネーの唱えた**重農主義**です。

ケネーは、農民の子として生まれ、努力して医師の資格を取り、最後はルイ15世の侍医にまで登りつめた人物。子どもの頃に体験した貧困と、いま暮らしているヴェルサイユ宮殿の豪華な暮らし。同じフランス王国内に、これほどの貧富の差！ 晩年のケネーは経済学の研究にのめりこみ、あの『**百科全書**』に「小作人」という項目を書き、さらに自分の考えを『**経済表**』(1758)という本にまとめました。その要点はこうです。

フランスには、農民・地主貴族・商工業者という3つの階級がある。貴族はまったく働かず、農民から取り上げた税で生活している。商人は他人が作ったものを運んでいるだけで、ものは作っていない。手工業者は農民が作ったものを加工しているだけだ。一着の毛織物をつくるには、材料の羊毛と職人の労働が必要だが、羊は草を食べなければ羊毛を作れないし、職人は農産物である肉やパンを食べなければ仕事ができない。では農民は、どうやってものを作っているか。自然の恵みである太陽と雨と土から、農産物を作っている。農業がすべての産業の基本であり、農業が衰退すれば、商工業も成り立たない。貴族は、農民に対する不当な課税をやめよ！



ケネー



アダム=スミス

重農主義(フィジオクラシー)の「フィジオ」とは、「自然」という意味です。自然が守ってくれる農業には政府の保護はいらない。むしろ、放って置いてくれたほうがよい。「**なすにまかせよ**」(レッセ=フェール)、**自由放任主義**が重農主義のスローガンです。ケネーの弟子の**テュルゴー**は、財政難に苦しむルイ16世の財務長官に抜擢ばってきされ、フランス革命の扉を開く役割をしました。

晩年のケネーと面会し、大きな影響を受けたイギリス人**アダム=スミス**は、『**諸国民の富**』(1776)を発表。スミスの学説は、重農主義の自由放任主義をすべての産業に拡大し、**自由主義経済(市場経済)**を理論化しました。経済学の古典という意味で、**古典派経済学**ともいいます。その要点は、こういうことです。

あなたが今日食べた牛丼は、あなたが作ったコメではなく、あなたが育てた牛でもない。誰かが作ったコメと牛肉を、牛丼屋が貨幣で仕入れ、牛丼に加工したものだ。このように現代社会は、**分業**と交換で成り立っている。ここで問題になるのは交換の基準。コメ1キロがいくらで、牛肉1キロがいくらか、加工していくらになるかという**価値**が決まらなければ、交換ができない。

価値には2つある。たとえば、牛丼の場合は、材料費+賃金+もうけ=「本当の価値」。実際に客が支払うのが「交換価値」。悪徳牛丼屋がいて、労働価値300円の牛丼を3000円で売り出したとする。客はあきれて、その店には寄り付かなくなる。店主は値段を下げざるをえない。こうして、「交換価値」は限りなく「本当の価値」に近づく。まるで、「**神の見えざる手**」が、操っているように。

牛丼屋は、誰かに命令されて300円に値下げするわけではなく、客を集めるためにやっている。**個々の人間が自分の利益を追求していくことが、社会全体に調和をもたらす**。だから、産業資本家の諸君、自由にもものをつくり、自由に市場で売ちなさい！ 政府は、経済に口出ししてはいけません。

『諸国民の富』が出版された **1776年、アメリカ独立宣言**が出されました。スミスは、イギリス政府の重商主義政策がアメリカの産業を圧迫したことを批判します。

当時のイギリスでは産業革命が進行し、**資本主義**社会が生まれつつありました。未来がばら色に見えた、幸せな時代です。19世紀にはいり、労働者の貧困という産業革命の影の部分が明らかになると、何でも自由にやればうまくいくという、スミスのようなノー天気な考え方は通用しなくなっていきます。スミスの考えを批判的に発展させたのが、マルサスとリカードです。

地主(ジェントリ)出身の**マルサス**は、『**人口論**』で貧困の問題を論じました。人口は2倍、4倍…とねずみ算式に増えていくが、食糧の増産率は一定である。必然的に食糧不足になり、貧困者が増加する。これを防ぐには、結婚年齢を遅らせて出産を制限するか、戦争や疫病を待つしかない…ずいぶん悲観的ですが、自然にまかせればどんどん悪くなる、という意味で、スミス批判になっています。

ロンドンでユダヤ系の株式仲買人の家に生まれた**リカード**は、自分も株取引で成功します。その後は下院議員として**穀物法廃止**を訴え、穀物法を擁護するマルサスと論争しました。産業資本家を擁護し、地主に反対する立場から、『**経済学および課税の理論**』を発表。この本でリカードは、「ものの価値は、投入された労働量で決まる」という**労働価値説**を唱え、マルクス経済学に影響を与えました。マルクスはリカードを高く評価し、マルサスをけなします。

スミス、マルサス、リカードと続いた自由主義経済学を正面から否定したのが、マルクス主義経済学と、リストの歴史学派経済学、ケインズの近代経済学です。

危険人物としてプロイセンで指名手配され、パリを経てロンドンに逃げてきた**マルクス**は、『**資本論**』を出版しました(2巻目以降は、遺稿を友人**エンゲルス**がまとめて出版)。マルクスは、労働者の貧困の原因を徹底的に解明しようとしました。その内容はこうです。

リカードの労働価値説によれば、労働量によって商品の価値は決まり、それに応じた給与が支払われるはず。しかし実際には、労働者は自分の労働に見合った賃金を受け取っていない。その差額(**剰余価値**)は、資本家のポケットに入っているのだ。

このようなネコババによって資本家はますます豊かになり、労働者はますます貧困化していく。しかし、労働者が貧困化すれば、彼らはものを買わなくなり、商品は売れ残る。資本家は自分で自分のくびを絞めていることになり、資本主義は崩壊へ向かう！！

マルクスとはまったく違う視点からイギリス自由主義を批判したのがドイツの**フリードリヒ=リスト**です。ウィーン体制下でバラバラ状態だったドイツは、イギリス商品の流入で手工業が打撃を受けていました。イギリスに対抗するために、ドイツ諸国をまず経済統合し、外国商品に高関税をかけ、産業を育成するしかない。この考え方を実現化するために、**関税同盟**の成立にも努力しました。

スミス流の自由主義経済では、先進国のイギリスが一人勝ちするだけだ。各民族にはそれぞれ歴史や伝統があり、これを守っていくのが価値あることなのだ、というリストの考えは**歴史学派経済学**といい、政治思想の**民族主義(ナショナリズム)**、文学の**ロマン主義**、法学の**歴史法学**と一体のものです。

ドイツ統一につながるリストの考え方は、ウィーン体制(バラバラのドイツ)を守りたいメッテルニヒからいらまれました。政治的迫害を受け続けたリストは 1846 年にピストル自殺してしまいます。あと2年がんばれば、三月革命でメッテルニヒが失脚するのを見られたのに！ 一方のマルクスは、亡命にもめげず『**共産党宣言**』(1848)を発表。こっちのほうがしぶとい…



リカード



マルクス



F.リスト



ケインズ

本家のイギリスで、自由主義経済が否定されたのは、1930 年代、**世界恐慌**のときです。アメリカにはじまった恐慌は、すべての資本主義国に拡大し、イギリスでも企業倒産が相ついで、失業者があふれました。もはや人々は、「放っておけば、うまくいく」というスミス流自由主義を信用できなくなりました。

ケンブリッジ大学の**ケインズ**が書いた『**雇用・利子・貨幣の一般理論**』(1936)(略してケインズの『一般理論』という)は、恐慌が起こる原因を、需要と供給のバランスから解明しました。「古典派」に対して、**近代経済学**を確立したのがこの本です。

消費者はものを買いたい(需要)、生産者はものを売りたい(供給)。このバランスが崩れ、需要より供給が多すぎ、ものがまったく売れなくなったのが恐慌である。恐慌を防ぐには、需要を増やせばいい。なぜ、消費者はものを買わなくなったのか。カネがないからである。買いたい気持ち(需要)はあるが、カネがな

いから買えない(需要が有効ではない)。だから、政府が国民にカネを与えて、好きなものを買える状態(有効需要)を作り出せばよいのだ。

その方法として、**公共事業**を起こし、失業者に給与を支払えばよい。政府は支出が増えるから、一時的に財政難となる。しかし、景気がもとに戻れば、**税金も回復し、採算はとれる**。恐慌を放っておくのは一番よくない。資本主義国でも、**政府が積極的に経済を統制すべきだ**。

この考え方は、自由放任の資本主義を修正したので**修正資本主義**ともいい、恐慌に苦しむ各国が採用しました。米国の**F.ローズヴェルト**が**ニューディール政策**で、ドイツの**ヒトラー**が**四カ年計画**で、いずれも大規模な公共事業を行い、失業者を救済しました。これ以後、**スミス流の完全な自由放任経済は、もはや存在しません**。

ケインズ主義の弱点は、採用した政府が、莫大な**財政赤字**を引き起こすことです。赤字解消のためには、結局、将来の増税しかなく、増税すれば、再び景気は悪化するという悪循環になります。第二次大戦で多くの国が荒廃し、唯一の経済大国となった米国も、**ベトナム戦争**以後は財政赤字に苦しみ続けました。ケインズに対する批判は、自由放任主義、小さな政府への回帰となります。

オーストリア出身のユダヤ人**ハイエク**は、『隷属への道』で共産主義もナチズムも同じ全体主義である。人間が経済を神のようにコントロールできるというのは間違いだ、個人の自由を絶対に制限してはならない！と主張しました。

米国シカゴ大学の**フリードマン**は、15歳で大学卒業という天才。ケインズ主義を批判し、政府は通貨量だけをコントロールし、公共事業なんかやめ、福祉も削減し、減税により、国民にもっと自由を与えるべきだ、と主張しました。この考え方を**新自由主義**といい、80年代に米国の**レーガン政権**、英国の**サッチャー政権**が採用しました。

日本では、ケインズ主義をとる自民党政権が続き、建設業界と結託して道路を作り続け、数百兆円という財政赤字を生みました(注)。このため 2000 年代に**小泉政権**が登場、慶応大学の竹中平蔵が経済産業相となり、新自由主義を採用。小泉は、「無駄な道路は作らない!」、「道路公団民営化!」、「郵政民営化!」、「抵抗勢力をぶっ潰す!」と叫びました。



レーガン



サッチャー



小泉純一郎

その結果、これらの国々では財政赤字削減に成功し、景気が回復したものの、自由主義経済という名の弱肉強食の結果、貧富の差が拡大。日本でも下層社会が拡大し、新たな問題が生まれています。イギリス以外のヨーロッパ諸国では、いまでもケインズ主義を採用、重税だが高福祉という社会が多いようです。

現在、大学の経済学部では、ケインズ主義者(ケインジアン)と新自由主義者が半々です。あなたの大学の教授が、小泉改革をボロくそにけなすなら前者、ほめるなら後者ですね。

